



## 道路に並木を植えるようになったのはいつ頃からですか？

わが国で道路に並木を植えるようになったのは、天平宝字3（759）年のことです。東大寺の僧普照が、当時各地方から中央に租、庸、調の貨物を輸送した諸国の農民たちの苦労を見かねて、駅路（宿駅から宿駅へ通じる道）の両側に果樹を植えることを役所に進言し、畿内において並木として果樹を植えたという記録があります。当時、果樹として植えられたのは柿などで、旅人たちに夏には日陰を、秋には実った果実を提供することができたのです。その後、時代は変わっても、並木を保護しようとする政策は現代まで続いています。

織田信長は天正3（1575）年、東海・東山両道の修築の際、松・柳の並木植樹を命じ、同13年には上杉謙信も領内大小の道路に、松・柏・榎・漆などを並木として植えさせた記録があります。しかし、並木が全国の主な街道に植えられたのは江戸時代になってからのことです。

江戸幕府は慶長9（1604）年、諸街道の改修、一里塚の設置とともに並木を植えさせ、宝暦12（1762）年には、五街道、脇街道など全国すべての並木の植えつき、幅の狭い道の改修、掃除の指定などを細かく定め、並木の保護を励行させました。

諸藩でも並木を植えその保護を行うようになり、ほとんど全国各地に普及しました。たとえば、熊本藩主加藤清正は豊後街道に杉並木を植えて厳重に保護し、前田利長は幕府に先立ち加賀国内に並木を植えさせ、会津藩では並木の枯れた箇所などに赤松を植えるなど、その保護策を徹底していたようです。中山道の安中～原市間の杉並木（天保時代：約700本）は、延宝9（1681）年以降に上野国の安中藩主板倉重形が旅行者の暑さを避け



るために植樹させたものだとわれています。

最も著名なのは、箱根や日光の杉並木です。箱根の杉並木は、松平正綱が元和4（1618）年東海道改修の際植樹したものとされています。芦ノ湖畔の国道1号に沿って杉の巨本が並列し、「昼なお暗き杉の並木、羊腸の小径は苔滑らか」と歌唱されてきました。日光の杉並木も、同じく正綱が寛永2（1625）年から慶安元（1648）年まで日光東照宮に植樹、寄進したものです。東照宮へ行く日光道中・例幣街道・会津西街道の三方、合わせて約40km、20万本もの杉苗が植えられました。

#### Topic ～日光の杉並木のオーナー制度って?!～

日光の杉並木は、延長が世界一として「ギネスブック」に載っています。延長37km、直径30cm以上の杉並木が今も1万3000本以上あります。しかし、近年の大気環境の悪化で枯れるものも少なくありません。このため、企業などに杉1本を1000万円で買い上げてもらい、樹勢回復のお金を捻出する並木オーナー制度が設立されています。